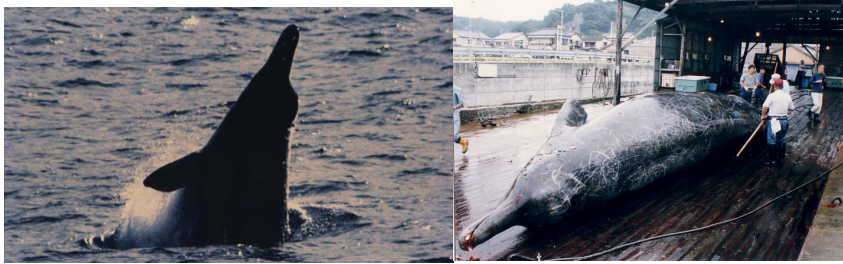


# ツチクジラ 太平洋・日本海・オホーツク海

Baird's beaked whale *Berardius bairdii*



## 管理・関係機関

農林水産省

## 生物学的特性

- 最大体長・体重：9～12 m（上顎先端から尾鰭分岐点までの長さ）・9～12 トン
- 寿命：雄 84 歳、雌 54 歳（捕獲物の最高年齢）
- 性成熟年齢：雄 6～11 歳、雌 10～15 歳に性成熟に達する。
- 繁殖期・繁殖場：交尾期 10～11 月、出産期 3～4 月・繁殖場は調査中
- 索餌期・索餌場：周年・房総、常磐沖ほか
- 食性：魚類、頭足類
- 捕食者：シャチ

## 利用・用途

肉は房総半島周辺でタレと呼ばれる乾肉、他の地域では、生鮮肉、缶詰加工用肉等。脂皮は汁物。

## 漁業の特徴

捕獲は少なくとも 17 世紀に遡り、明治時代初頭まで千葉県勝山沖を中心に手投げ鉾で捕獲していた。戦後、小型捕鯨業（令和 2 年 12 月 1 日付の漁業法改正に伴い、「小型捕鯨業」から「基地式捕鯨業」に名称が変更された）による捕獲が急増し、漁場も千葉県周辺から三陸、北海道、日本海沿岸まで広がった。本種は体長 10 m に達する歯鯨類で、IWC の管轄外種であり、商業捕鯨モトリアム以降も、我が国政府の管理の下で捕獲が継続している。現在の商業捕獲は、大臣許可漁業である基地式捕鯨業のみで実施され、主に北海道網走市、青森県八戸市、宮城県石巻市、千葉県南房総市にある鯨体処理場で水揚げ・解体・処理されている。

## 漁獲の動向

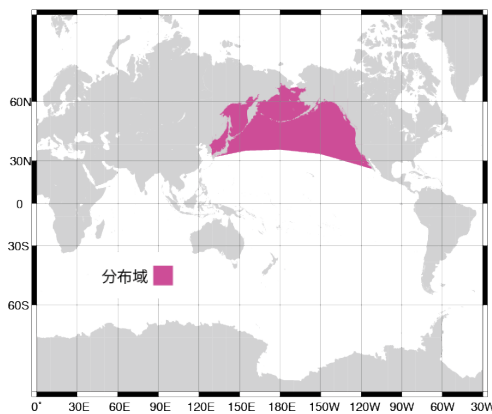
太平洋側沿岸での捕獲が主体であり、1950～1970 年代初頭にかけて年間 100 頭を超える捕獲が行われた（自由操業）。1983 年に自主規制枠、1990 年に捕獲枠が導入され、1999 年以降は、年間捕獲枠 62 頭（太平洋沿岸＋オホーツク海 54 頭、日本海 8 頭）が設置されてきた。2005 年に枠の見直しが行われ、系群ごとに太平洋 52 頭、オホーツク海 4 頭、日本海 10 頭、計 66 頭の捕獲枠が設置された。なお、このうち太平洋系群については、その年の捕獲数が捕獲枠に満たなかった場合、10 頭を上限に翌年への繰り越しが認められた。2023 年は太平洋 62 頭（前年からの太平洋の捕獲枠繰り越し 10 頭を含む）、オホーツク海 4 頭、日本海 10 頭、計 76 頭の捕獲枠の下に操業が行われた。2023 年は年間 76 頭の捕獲枠の下に操業が行われ、太平洋で 18 頭、日本海で 10 頭捕獲し操業を終了した。2024 年 1 月に、新たな資源量（太平洋）の情報に基づき（後述）、2024 年（1 月 1 日～12 月 31 日）の捕獲枠は、太平洋系群 44 頭、日本海系群 10 頭、オホーツク海系群 4 頭、計 58 頭に設定された。

## 資源状態

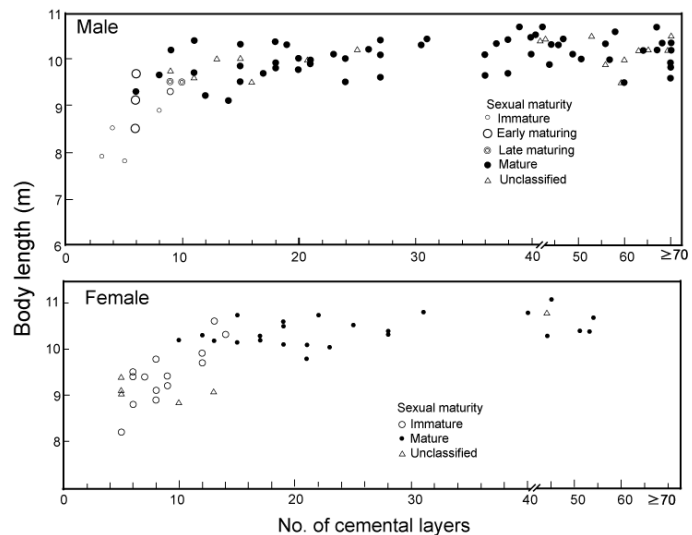
資源量の推定値は、太平洋沿岸（北海道～相模湾）：5,000頭（95%信頼区間：2,500～10,000頭：1991～1992年）、日本海東部：1,500頭（同370～2,600頭：1983～1989年）、オホーツク海南部：660頭（同310～1,000頭：1983～1989年）である。過去の統計は別種の混在の可能性もあり、1970年以前の捕獲が初期資源に与えた影響は明らかでない。最新の資源状況を把握するため、太平洋側沿岸では2015年と2017年に、日本海側では2018年に本種を主対象とした目視調査を実施した。2000年代以降に実施した目視調査データに基づき、太平洋沿岸（房総～北海道）のツチクジラの長期時系列の資源量が推定された。そのうち、2017年の資源量推定値は、4,301頭（CV=0.82）であった。資源量のさらなる更新のため2021年～2023年夏季は太平洋沿岸、2023年秋季はオホーツク海南部にて目視調査を実施した。日本海東部については2008年と2018年に実施した目視調査データに基づき資源量推定値の更新作業を行い、暫定的なものとして2008年が1,410頭（CV = 2.06）、2018年が1,754頭（CV = 0.94）といった資源量推定値が得られている。g(0)で補正すると2008年が1,678頭、2018年が2,098頭となる。現時点では資源量推定値の更新作業中であり、資源水準は調査中とした。近年の年間捕獲頭数は推定資源量の1%前後であり、捕獲物の性比、体長組成の経年変化から見た限り、現在の捕獲レベルが資源状態に悪い影響を与えているという兆候はみられていない（図6）。ただし、近年の推定資源量は、特に太平洋側で1980～1990年代初頭の推定値を下回っており資源動向を注視する必要がある。したがって、資源動向は横ばいと考えられるが、更新された資源量推定値を基に再検討が必要である。資源動向を正しく把握するために、今後も目視調査を継続し推定値を更新していくとともに、その動向をモニタリングしていくことが必要不可欠である。

## 管理方策

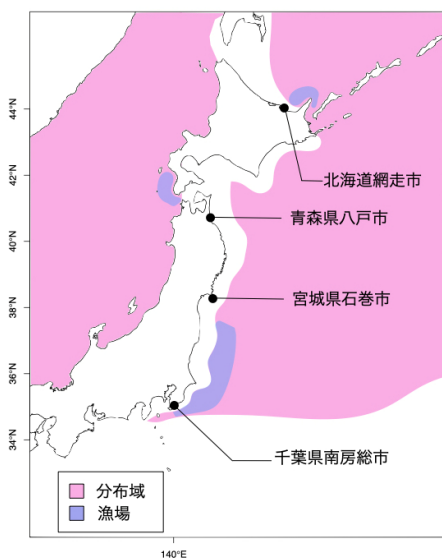
IWC 科学委員会は、ひげ鯨類を対象に資源管理モデル（改訂管理方式：RMP）を開発し、2019年に再開した日本のひげ鯨類を対象とした商業捕鯨もこれに準じて管理しているが、社会構造（群れ構成や繁殖様式等）が複雑な本種（歯鯨類）には適用できない。このため推定資源量の約1%を目安とした捕獲枠や、Potential Biological Removal（PBR：混獲動物の管理に米国で採用されている資源量、増加率等の不確実性を取り込んだ捕獲枠算出モデル）による試算値等を参考に農林水産省が捕獲枠を設定している。この他、基地式捕鯨業の捕鯨船（5隻）及び鯨体処理場が農林水産大臣による許可制となっている。



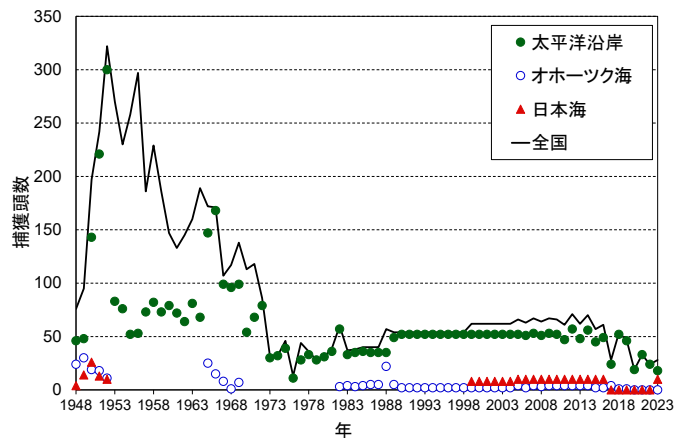
ツチクジラの分布



体長と年齢の関係（上図：雄、下図：雌）



日本周辺におけるツチクジラの分布と漁場及び主な水揚地（鯨体処理場）



ツチクジラ捕獲頭数の推移（1948～2023年）

ツチクジラ（太平洋・日本海・オホーツク海）の資源の現況（要約表）	
世界の漁獲量 （最近5年間）	なし
我が国の漁獲量 （最近5年間）	19～47 頭 最近（2023）年：28 頭 平均：30 頭（2019～2023 年）
資源評価の方法	ライントランセクト法に基づく目視調査データ解析から資源量を推定
資源の状態 （資源評価結果）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・太平洋沿岸（北海道～房総）： 4,301 頭 CV=0.82（2017 年）</li> <li>・日本海東部： 2,098 頭 CV=0.94（2018 年）</li> <li>・オホーツク海南部： 660 頭（310～1,000 頭、1983～1989 年） （過小推定の可能性大）</li> </ul> <p><b>【資源水準】</b> 現在、資源量推定値の更新作業中であり、資源水準は調査中とした。</p> <p><b>【資源動向】</b> 資源動向は横ばいと考えられるが、更新された資源量推定値を基に再検討が必要である。</p>
管理目標	現在の資源水準の維持
管理措置	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2023 年の年間捕獲枠 66 頭（日本海 10 頭、オホーツク海 4 頭、太平洋 52 頭）</li> <li>・洋上解体禁止と鯨体処理場の指定 （北海道網走市、北海道釧路市、青森県八戸市、宮城県石巻市、千葉県南房総市、和歌山県太地町）</li> <li>・農林水産大臣による許可制（許可隻数 5 隻）</li> <li>・衛星を利用した船舶位置の確認</li> </ul>
管理機関・関係機関	農林水産省
最新の資源評価年	2023 年
次回の資源評価年	未定